



# 探偵 大埔は大埔？

大埔は、大埔の変化したものと考えても良いのではないが、長宗我部時代には、大曾、(大曾禰)郷とも呼んでいたようだ。曾禰の元の字は、祖禰ではなかったかという説がある。祖先と父あるいは禰は「おたまや」の意味があるので、父のおたまやと解する説。

さて、我が南国市の大埔だが、この「埔」が「埔」だとすると、地形的には「石まじりのやせ地」という意味になり、「たいへん広い石まじりのやせ地」という解釈が成り立つ。

——現在は、と言えば「たいへん肥沃なすばらしい土地」なのであるが……？。時代を限りなく太古にタイムスリップしてみると、弥生人の住んでいたころ、住み始めたところ——縄文人の文化と弥生文化が混ざりまじっていたころ、人は土地に漢字で名前をつけた……そのころは、今の大津、岡豊町の南通

寺島あたりまでが、浦戸湾。間違いなくこのあたりは物部川の流域であったと考えられる——。

川底の土砂は、細かなものほど下流に流れ、やがて砂浜が誕生したのであろう。川の途中には、俗に言う「玉石」あるいは「砂利」と言った砂より大きなものが残って地形を成す。砂浜の上流には、小石の層ができ、そのまた上流には、砂利大の小石、その上流には玉石、そのまた上流には大きな石が堆積される。

そのような繰り返しによって川に岸も生まれ、それは水の浸入を許さない土地となり、最終的には、最上層部に山奥からの「砂よりも軽い土を盛りあげて」豊かな土地となる——とすれば、今の「大埔」がそれで、大曾、大曾禰、大埔のころは、石まじりの未熟な土地だったと言えるかもしれない——弥生人が呼んだかもしれない、大埔のころ、今の大埔は可能性をいっぱい秘めた、これからの土地と呼んだのか？と考えると、ここにもやっぱり、人の弥生人のロマンが潜んでいる……？

## 部落の実態と今後の課題⑨

### 〈採用試験の現場では〉

〈不況下で増える就職差別〉  
バブルの崩壊、経済不況が続くなかで、就職差別が増加し、強められる傾向が見られます。

今年の就職状況で、最も目を引いたのは、女子大生に対する就職差別でした。

はじめから、「女子大生は採用しません」という企業もたくさんありましたし、「面接にはミニスカートで来なさい」「今夜、一緒に飲みに行けば採用を考えてもいい」など、女性を平然と蔑視する採用担当者もいました。

このような事例に対して、八年前に施行された「男女雇用機会均等法」は、まったく役に立ちませんでした。この法律が作られる時、労働者代表は、「罰則規定のない法律は法律とはいえない」と、事業者代表や政府の委員に強く

# いま部落は、そして……。

要求しましたが、「行政指導で十分だ」としておし切られ、法律が制定施行されました。その時の労働者代表の心配が、今日の不況下の就職難の時にあって、的中しました。

就職差別を受けているのは、女子大生だけではありません。一昨年あたりから、身元調査は増加する傾向にありますし、十四項目に違反する面接も増えて

## 同和教育シリーズ

います。なかでも、親の職業や地位、家族のなどを聞く企業がかなりあります。社会的に弱い立場におかれている人々や、被差別部落出身者などに対する就職差別は、増えているのです。

〈アメリカや諸外国では……〉  
就職差別に対する取り組みは、アメリカや諸外国では、日本より数段進んでいます。ある女性が就職しようとする

場合、日本であれば、未婚か既婚か、既婚であれば子どもか、現住所や年齢などを尋ねると思います。これらはいずれも就職差別なので、また、後日に採否を通知するというやり方は、認められなく、面接終了時に本人に伝えなければなりません。

このように、アメリカ、カナダ、E.C諸国では、「企業が労働者に求めるものは労働能力のみである」という考えが徹底しているのです。

〈私たちが就職差別を許しているのでは？〉  
前述のように、日本ではまだ本人の労働能力以外の条件で採否が決められることが多いのです。

これを許しているのは、私たち日本人の意識の口に、人権意識がまだまだ希薄で、差別を許す社会体質が残っているからではないでしょうか。次回から、私たちの人権意識はどうなっているかを点検したいと思います。